

土地分類基本調査

「彦根東部」・「津島」・「桑名」

5万分の1

国 土 調 査

岐 阜 県

1 9 8 5

序 文

この調査は、土地に関する基礎的情報である「地形」、「表層地質」、「土壌」、「土地利用現況」等の土地条件を体系的かつ総合的に把握するもので、国土調査法に基づき昭和57年度から実施しているものであります。

これは昭和59年度に5万分の1地形図「彦根東部」、「津島」、「桑名」のうち、岐阜県の県域について調査したものをとりまとめたものです。

調査に係る地域のうち、木曾川、長良川、揖斐川の合流点に開ける低地は、土地改良事業の実施により現在は肥沃な水田地帯となっておりますが、「輪中」と呼ばれる独特の地形を生んだ「水」との戦いの歴史があります。このように先達から受け継いだ国土を開発、あるいは保全することにより、健康で文化的な生活環境とし、次代に手渡すことが私たちの使命と考えます。

土地利用計画策定の基礎資料としてこの成果が広く活用されることを望むとともに、調査に御協力いただきました関係各位に深く謝意を表わす次第です。

昭和61年3月

岐阜県企画部長 足立 綱夫

ま え が き

- 1 本調査は、国土調査法（昭和26年法律第180号）第5条第4項の規定により、国土調査の指定を受け、国土庁土地局国土調査課の指導を受けて、岐阜県が事業主体になり実施したものである。
- 2 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
- 3 調査項目、成果の作成機関及び担当者は、下記のとおりである。

総 括	岐阜県企画部土地対策課 〃 〃 〃	課 長 西本 徹雄 課 長 補 佐 坪井 寿一 調査指導係長 安藤 正敏 主任技師 服部 富雄
地形分類調査	岐阜大学教育学部	教 授 関根 清
表層地質調査	岐阜大学教育学部 岐阜県農業試験場	教 授 梶田 澄雄 部長 研究員 渡部 和雄
土 壤 調 査	岐阜県林業センター 〃 〃	主任専門研究員 野々田三郎 主任技師 中川 一 技 師 川尻 秀樹
土 地 利 用 現 況 調 査	岐阜県企画部土地対策課	主任技師 服部 富雄

目 次

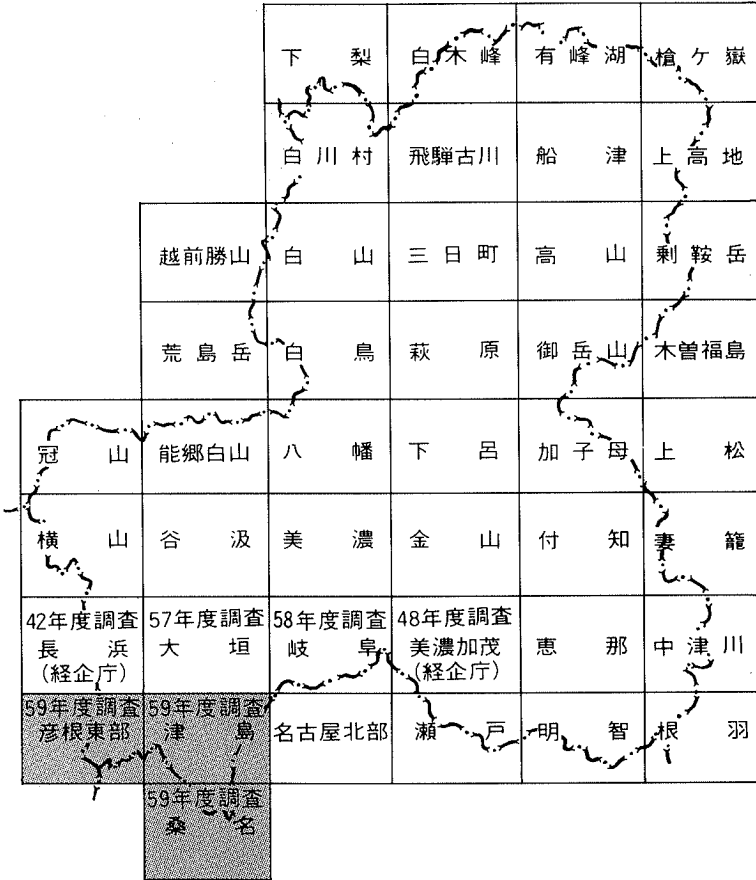
総 論

I 位置および行政区画	1
II 人 口	2
III 産 業	4

各 論

I 地 形 分 類	9
II 表 層 地 質	23
III 土 壤	29
IV 土地利用現況	43

位置図



総

論

I 位置および行政区画

1 位置

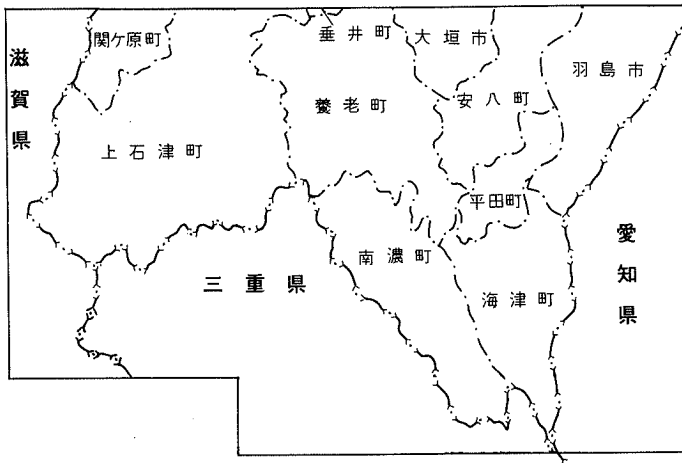
この調査の対象地域は、建設省国土地理院発行5万分の1地形図の「彦根東部」、「津島」、「桑名」図幅のうち岐阜県域内である。経緯度は東経 $136^{\circ}15'$ ～ $136^{\circ}45'$ 、北緯 $35^{\circ}00'$ ～ $35^{\circ}20'$ の範囲である。

これは岐阜県の南西端に位置し、西側は滋賀県、南側は三重県、東側は愛知県に接している。

2 行政区画

本図幅の行政区画は、大垣市、羽島市、海津町、平田町、南濃町、養老町、上石津町、垂井町、関ヶ原町、輪之内町、安八町の2市9町からなっている。(図-1参照)

図-1 行政区画図



Ⅱ 人 口

調査地域にかかる2市9町の人口は、346,504人（昭和60年国勢調査）で県人口の17.1%を占めている。

これらの市町では、昭和45年から60年までに約4,300人の人口増をみたが、この間の増加率は県平均とほぼ同等である。

この地方の中心都市である大垣市は、県都岐阜市に次ぐ人口規模であるが、近年の増加率は県平均を下回っている。

表-1 人 口

区 分 行政区域	昭 和 4 5 年		昭 和 5 0 年		昭 和 5 5 年	
	人 口 (人)	世帯数 (戸)	人 口 (人)	世帯数 (戸)	人 口 (人)	世帯数 (戸)
大 垣 市	134,942	33,008	140,424	36,444	143,151	42,644
羽 島 市	48,075	10,616	52,570	12,461	56,975	14,553
海 津 町	10,769	2,255	11,087	2,377	12,353	2,711
平 田 町	8,048	1,723	8,289	1,850	8,612	1,932
南 濃 町	12,389	2,679	15,004	3,475	16,706	4,184
養 老 町	27,766	6,146	29,483	6,775	31,372	7,418
上石津町	7,548	1,884	7,449	1,869	7,558	1,884
垂 井 町	23,240	5,444	24,794	6,171	26,404	7,061
関ヶ原町	10,788	2,470	10,718	2,618	10,483	2,875
輪之内町	7,469	1,558	7,820	1,636	8,111	1,713
安 八 町	12,354	2,285	13,014	2,844	13,901	3,613
計	303,388	70,068	320,652	78,520	335,626	90,588
岐 阜 県	1,758,954	433,394	1,867,978	483,766	1,960,107	539,740

交通網、道路網の発達により、県域を越えて名古屋市を中心とする愛知県からの人口流入の影響を受けている町もある。

南濃町は昭和45年から55年にかけて高い人口増加率を示しているが、これは私鉄を利用すれば名古屋市の通勤圏に入るため松山地区、吉田地区などで宅地開発が行われたためである。

また、最近では海津町が高い人口増加率を示しているが、交通路網の整備により、愛知県への自動車通勤が可能になったためである。

昭和60年		人口増減(人)			人口増減率(%)		
人口(人)	世帯数(戸)	45~50年	50~55年	55~60年	45~50年	50~55年	55~60年
145,910	43,873	5,482	2,727	2,759	4.1	1.9	1.9
59,760	15,457	4,495	4,405	2,785	9.3	8.4	4.9
13,630	3,066	318	1,266	1,277	3.0	11.4	10.3
8,669	1,968	241	323	57	3.0	3.9	0.7
17,239	4,339	2,615	1,702	533	21.1	11.3	3.2
32,919	7,905	1,717	1,889	1,547	6.2	6.4	4.9
7,503	1,873	△ 99	109	△ 55	△ 1.3	1.5	△ 0.7
27,899	7,474	1,554	1,610	1,495	6.7	6.5	5.7
10,147	2,829	△ 70	△ 235	△ 336	△ 0.6	△ 2.2	△ 3.2
8,295	1,757	351	291	184	4.7	3.7	2.3
14,533	3,882	660	887	632	5.3	6.8	4.5
346,504	94,423	17,264	14,974	10,878	5.7	4.7	3.2
2,028,536	567,946	109,024	92,129	68,429	6.2	4.9	3.5

資料 昭和60年国勢調査結果による。

Ⅲ 産 業

1 農 林 業

地域内の市町の総農家数は、22,875戸でこれは県下総農家戸数の19.4%にあたる。また、経営耕地面積は17,177haで、県下総経営面積の23.6%を占めている。(表-2 参照)

表-2 農業の概要

区分 行政 区域	農 家 数				経営耕 地面積 (ha)	農 業 粗 生 産 額 (百万円)				
	総 数 (戸)	専 業 (戸)	兼 業 (戸)	事業率 (%)		総 額	米	野菜	畜産	その他
大垣市	4,991	124	4,867	2.5	2,980	4,744	2,482	322	1,412	528
羽島市	3,677	138	3,539	3.8	2,420	4,954	1,901	689	2,080	284
海津町	1,660	164	1,496	9.9	2,090	4,799	1,950	1,776	789	284
平田町	978	86	892	8.8	969	2,282	765	574	862	81
南濃町	1,339	87	1,252	6.5	1,020	3,593	586	211	2,336	460
養老町	3,348	118	3,230	3.5	3,110	4,882	2,492	734	1,306	350
上石津町	1,375	62	1,313	4.5	726	973	459	90	168	256
垂井町	2,026	47	1,979	2.3	1,280	1,651	873	132	376	270
関ヶ原町	864	28	836	3.2	382	579	252	79	156	92
輪之内町	1,232	52	1,180	4.2	1,300	2,431	1,102	366	853	110
安八町	1,385	56	1,329	4.0	900	1,573	774	422	263	114
計	22,875	962	21,913	4.2	17,177	32,461	13,636	5,395	10,601	2,829
岐阜県	117,776	6,122	111,654	5.2	72,900	164,696	50,200	29,643	65,351	19,502

資料 岐阜県農林水産統計年報(昭和58~59年)による。

農家数は1980年世界農林業センサスによる。

養老山地東方の平野部は土地改良事業が進み、基幹作物としての米作が盛んである。また養老山地東面の丘陵地を利用しての果樹（みかん）栽培や乳牛の飼育などの畜産業も盛んである。

林野面積は2,931haで県下総林野面積の3.0%となっている。（表－3 参照）

調査地域には集約的林業（複層林経営）で有名な今須林業地（関ヶ原町）が含まれている。

表－3 林業の概要

行政 区域	林 野 面 積 (ha)				林 家 数 (戸)
	総 数	国 有 林	公 有 林	私 有 林	
大 垣 市	37	—	0	37	343
羽 島 市	—	—	—	—	117
海 津 町	—	—	—	—	18
平 田 町	—	—	—	—	17
南 濃 町	344	—	35	309	222
養 老 町	216	8	8	200	422
上石津町	1,235	11	154	1,070	1,545
垂 井 町	393	1	1	391	1,001
関ヶ原町	706	—	31	675	607
輪之内町	—	—	—	—	4
安 八 町	—	—	—	—	11
計	2,931	20	229	2,682	4,307
岐 阜 県	96,706	20,434	7,622	68,650	64,162

資料 林野面積は昭和59年度岐阜県林業統計書による。

林家数は1980年農林センサスによる。

2 工 業

この地域の工場数は県下総工場数の16.7%にあたる4,440事業所であり、従業員数は約5,400人で、県総数の20%を占める。

年間製造品出荷額は9,536億円となっている。(表－4 参照)

表－4 工業の概要

行政区 区域	工 場 数				従 業 者 数 (人)			年間製造品 出荷額等 (円)
	総 数	会 社	組合その 他の法人	個 人	総 数	常 用 労働者	個人事業主 及び家族 従業者数	
大垣市	1,379	490	11	878	24,138	22,716	1,422	43,842,189
羽島市	1,700	292	3	1,405	8,861	5,896	2,965	11,801,360
海津町	148	44	1	103	1,138	966	172	1,396,193
平田町	137	31	—	106	1,410	1,204	206	1,695,630
南濃町	94	32	—	62	1,985	1,885	100	3,094,940
養老町	221	90	1	130	3,621	3,372	249	6,660,806
上石津町	84	23	1	60	852	747	105	1,102,009
垂井町	220	89	—	131	5,327	5,105	222	10,954,041
関ヶ原町	100	25	—	75	2,177	2,094	83	3,753,362
輪之内町	132	16	—	116	739	559	180	551,224
安八町	225	38	—	187	3,899	3,530	369	10,506,450
計	4,440	1,170	17	3,253	54,147	48,074	6,073	95,358,204
岐阜県	26,439	7,029	331	19,079	270,753	237,713	33,040	404,073,327

資料 昭和59年工業統計調査結果による。

3 商 業

商店数は5,498店舗で県下総商店数の15.0%、従業員数は23,223人で県下総従業者の14.2%を占めている。また、年間販売額は5,860億円で県全体の12.4%となっている。(表—5参照)

表—5 商業の概要

行政 区域	商 店 数			従 業 者 数 (人)	年 間 販 売 額 (円)
	総 数	卸 売 業	小 売 業		
大 垣 市	2,840	531	2,309	13,656	40,973,830
羽 島 市	850	124	726	3,455	7,781,658
海 津 町	166	7	159	573	826,903
平 田 町	245	17	228	766	1,276,969
南 濃 町	226	9	217	730	1,095,280
養 老 町	430	41	389	1,557	3,257,830
上 石 津 町	105	3	102	230	172,097
垂 井 町	322	27	295	1,111	1,458,776
関ヶ原町	128	13	115	427	608,056
輪之内町	78	6	72	264	291,132
安 八 町	108	15	93	454	852,959
計	5,498	793	4,705	23,223	58,595,490
岐 阜 県	36,698	8,007	28,691	163,378	474,319,112

資料 昭和59年商業統計調査結果による。

飲食店・代理商・仲立業を除く。

各 論

I 地形分類

1 地形概説

本図幅地域は濃尾平野の西縁部から養老山地及び鈴鹿山地の北東部までの地域であり、山地、丘陵、台地、低地から構成されている。これらの地形の分布や配列は、ほぼ南北及び北西～南東方向に走る断層や濃尾平野の傾動盆地運動を反映して特徴的で明瞭である。

本図幅内の地形は大局的には東部に沖積平野、中央部に傾動的な地壘山地としての養老山地、西部に上石津町の地溝的な凹地状の丘陵・台地及び地壘山地としての鈴鹿山脈の順に南北に長く、東西に配列しているといえる。しかしながら、養老山地と濃尾平野との境が断層崖によって明瞭に区分されているために東部が沖積平野、西部が山地に二分されているともいえる。そして西部の山地部が断層的観点からは近畿三角地域の北東端に位置する地域にあたる。

近畿三角地域は敦賀湾—伊勢湾線を北東辺とし、敦賀から淡路島西岸に至る線を北西端として中央構造線を底辺とする三角形の地域であるが、この地域における主要な断層は南北走向の逆断層であり、これに加えて北北東～南南西ないし、東北東～西南西方向の右ずれ断層が組み合わさっている。従ってこれらの断層運動の特徴を反映した形で地形が配列している。

鈴鹿山脈や養老山地を画する断層はいずれも活断層であり、両山地の東側を画する断層が一志断層と養老断層である。一志断層は第四紀にその主な活動期をもっている活断層で雁行及び平行する断層の集合からなる断層系である。一方養老断層は敦賀から伊勢湾まで本州を横断する唯一の活断層系の断層である。

本図幅内の鈴鹿山脈や養老山地の両山地は古・中生界の石灰岩やチャートをはさんだ砂岩・頁岩の互層からなる壮年期の地形からなっている。これに対して両山地にはさまれた上石津町の地溝的な丘陵は鮮新・更新統の奄芸亜層群の地層からなる幼年期の地形からなりたっているので両者の境界は地形的急変部とよく一致して地形図上からも大局的には読みとることが可能であ

る。この関係は西側の鈴鹿山脈との境界で特に明瞭である。鈴鹿山脈の形成時期についてはこの丘陵を構成している奄芸亜層群中に、鈴鹿山脈に広く分布している黒雲母花崗岩の礫がほとんど含まれていないことから奄芸亜層群堆積後にその隆起量の大半が生じ、山地を形成したと考えられている。台地は上石津町の丘陵内の牧田川河谷沿いと養老山地の東側の断層崖下とに分布している。前者が河岸段丘からなる台地であるのに対して、後者は段丘化した隆起扇状地からなる台地である。低地は一部牧田川の扇状地を除いて沖積平野のうちでも中～下流部に位置している自然堤防・後背湿地の卓越する帯域（いわゆる自然堤防帯）と三角州帯域（三角州帯）からなりたっている。

大河川が内湾に流入するようなところに形成された沖積平野には沖積平野を構成する微地形の全てがみられる場合が多く扇状地帯域、自然堤防・後背湿地の卓越する帯域、三角州帯域の三帯域の地形域が見られる場合が多い。これらの帯域は複数のそれぞれ特徴的な微地形（単位地形）の集合から成り立っている。濃尾平野においてもそれはあてはまるといえる。

濃尾平野はその傾動盆地運動を反映して高度的には北東～北方向に高く、南西～南方向に低い。木曾川、長良川、揖斐川の木曾三川もこの傾動盆地運動を反映した河系分布を示し、このために沖積平野の単位地形や地形域もこれを反映して配列する傾向を示している。

沖積平野の地形域を構成する単位地形はいずれも洪水時の河川の氾濫によって形成された地形であり、河川の物質運搬量や氾濫規模とその回数によってそれらの規模・形態も変化する。濃尾平野においては、長良川・揖斐川両流域に比べて、木曾川流域の岩屑の生産量とその運搬・堆積量が多く、木曾川沿いに明瞭な段丘、扇状地などの地形が顕著に分布している。そして、これらが傾動盆地と相まって一層明瞭な北東高、南西低の地形環境を形成しているといえる。

濃尾平野の北及び北東部の丘陵や山地の一部はすでに名古屋圏としての都市域の拡大と、県都岐阜市としての都市域の拡大の二つの影響をうけて著しく地形改変が進行している。新興住宅やゴルフ場のような大規模造成地や造成用の砕石など土木建設用資材のための改変が主体である。そして主要部は

すでに改変しつくされた感さえある。このような高度経済成長期を契機とした都市化にともなう地形の改変は、本図幅山地や丘陵、台地においても進行している。特に養老山地においては大規模な土木建設用資材生産のための改変が進んでいる。奄芸垂層群からなる丘陵にもゴルフ場、キャンプ場などすでに地形改変が進んでいる。

2 山 地

本図幅の山地は①鈴鹿山脈の北端部に位置する霊仙岳（1,083.5m）を中心とする山地と②分離山塊化した養老山地及び③美濃越前山地と鈴鹿山脈とはさまれ地溝化した不破山地からなっている。これらの山地はいずれも壮年期山地であるが、地質や断層運動などの影響を反映して山頂部の地形は区域的に異なる。

(1) 鈴 鹿 山 脈 (I a)

鈴鹿山脈は大局的にはほぼ南北に稜部を連ねる山地である。その主稜線は標高1,000～1,200mに位置している。地質的には中・古生界のチャート、石灰岩をささむ砂岩・頁岩の互層からなり、小規模な石英斑岩の岩脈によって貫かれている地域もみられる。鈴鹿山脈は山脈の東西両側を断層によって明瞭に限られ、東西に傾動的な地壘山地である。このために本図幅内に位置する東側の断層崖が西側の近江盆地と画する断層崖に比べてより顕著で特徴的な地形を示している。従って主稜線及び主分水界もまた著しく東に偏在している。この東側の断層崖が活断層である一志断層によって形成された断層崖である。

一志断層は平行ないし雁行関係にある多くの逆断層の集合体であるので、一志断層系と呼ぶ方が適当であるといえる。それ故に一志断層系を構成する個々の断層の活動時期や活動形態・規模にはある程度の差異があり、観察する地域毎に異なった特徴を示していると考えられる。本図幅内の牧田川の河谷においてもこの一志断層系の断層崖はほぼ北東～南西、北～南方向の3ないし4個（本）の逆断層によって形成されている。東側に位置する急斜面を

一志断層系の断層崖とすれば、牧田川の河谷においてもその比高は約400mに達している。本図幅内ではこの一志断層系の断層を境にして中・古生層からなる山地と奄芸亜層群（鮮新・更新統）からなる丘陵に区分される。

山地の頂縁部には前輪廻の準平原遺物と考えられている小起伏面が存在し、石灰岩からなる山地において特に顕著であり、その高度は1,000m台、800~700m台、600m台などである。これらの小起伏面は鮮新世後期の侵蝕小起伏面と考えられている。

(2) 養老山地 (I b)

養老山地は濃尾平野の西縁に位置し、その境を急峻な断層崖によって明瞭に区分する標高800~600mの傾動的な地壘状山地である。地質的には、中・古生界のチャート、石灰岩をはさんだ砂岩・頁岩の互層からなっている。

筈ヶ岳(908m)を最高峰とする養老山地は標高800~600mと比較的よくその高度をそろえている。しかしその横断形は東西に著しく非対称であり、西側の山地頂部にはほとんど連続的に前輪廻の準平原遺物である小起伏な地形面が分布している。その標高は北部で800~700m台と高く、中央部で500m台に急激に低下し、再び南部で600m台に上昇している。また、西側斜面ではこれらの面の下に北部で標高500m台と400m台にそれぞれ二段の地形面が急斜面をへだてて分布している。東側斜面は数本の逆断層によってつくられた断層崖からなり、この断層崖下にすでに隆起している合流扇状地からなる緩斜面が形成されている。

(3) 不破山地 (I c)

この山地は本図幅においては南東端のみが位置しているが、関ヶ原町の南から南宮山に至る海拔高度400~300m前後の丘陵性の小山塊である。この山地の起伏量は300~100mであるが、大半は200m以下である。この山地は美濃越前山地と鈴鹿山脈とはさまれた凹地帯を形成している沈降性山地であるともいえる。山地の北側に面する山麓には扇状地・沖積錐が顕著に発達しているが、南側に面する山麓にはみられず対称的な地形環境を示してい

る。

3 丘 陵

この丘陵は鮮新・更新統の東海層群の奄芸亜層群からなる丘陵で、標高300m前後を最高位面とする丘陵である。この奄芸亜層群は岐阜県関ヶ原町から三重県松阪市付近までの約100kmにわたって分布し、山地（鈴鹿山脈）と沖積平野（伊勢平野）との間に丘陵の地形を形成している。本図幅内の丘陵はこの丘陵の北端部に位置し、岐阜県養老郡上石津町に分布する丘陵である。それ故にここでは便宜的に上石津丘陵と銘名し、この名称を用いることとする。

(1) 上石津丘陵（Ⅱa）

この丘陵は西側を鈴鹿山脈の北端部に、東側を養老山地によってはさまれ、地形的には南北に連なる幅約5kmの地溝的な丘陵からなっている。特に西側の鈴鹿山脈との境は顕著な断層崖によって境されている。

この丘陵は標高300m未滿の幼年期の地形からなりたっている。

この丘陵の西縁を形づくっている一志断層系の断層は ①上石津町萩原から鍛冶屋川上流へのびている40～50度西傾斜の逆断層、②上記断層（①）から分岐し、南北にのびる逆断層、③鍛冶屋川上流から岩須谷・延坂を経て牧田川左岸へのび、西山においてN35° E, W45° の断層面をもつ逆断層と、④牧田川右岸の細野から南へのび三重県藤原町白石から坂本を経て大貝戸に達するNS, W30° の断層面をもつ逆断層などからなっている。

この丘陵は地質的には主として鮮新・更新統の礫岩、砂岩、泥岩からなる奄芸亜層群によって構成されている。そしてこの丘陵内の奄芸亜層群は全般的には西へ20～30度傾斜し、鈴鹿山脈とは一志断層によって境されているものの養老山地へは不整合に堆積している。

本図幅内の丘陵は奄芸亜層群中の市之原、大泉、米野などの中・上部壘層からなっている。これらの地質分布は大局的には東西に中央部で二分され、西側に米野壘層、東側に大泉壘層が分布し、南東端に一部市之原壘層が分布

している。市之原罌層は礫層と泥層の互層よりなり、砂層をはさんでいる。大泉罌層は主として泥層よりなり、礫層と砂層をはさんでいる。米野罌層は層厚約200mの礫層よりなっている。これらの地質はその組成及び固結度を異にしているので、これを反映して地形も異なっている。一般的には礫層からなる地域の地形は他に比べて比高の大きな悪地（バッドランド）化が促進されている。本丘陵においてもこのような地質の相違を反映した地域性があらわれている。それ故に本丘陵内の西半部において単位面積当りの起伏量は東半部より大きくなっている。

本丘陵には一志断層に平行・斜交する断層やリニアメントが顕著に認められ、これが地質と相まって一層明瞭な地形特徴をつくりだしている。

4 台 地

本図幅内の台地は牧田川流域の上石津町多良と時付近に分布する段丘地形と養老山地東側の養老断層崖下に分布する開析扇状地・開析沖積錐からなる合流扇状地である。前者の段丘地形とは河岸段丘であり、旧河床面の隆起によって又は気候変動にともなう河川の侵蝕力の増加によって河床が下刻され、河道沿いにひろがる砂礫からなる平坦な階段状の地形にあてた名称である。従って形成時期の古い段丘ほど高位に位置し、後の侵蝕作用の結果その保存状態は悪くなる。後者の合流扇状地とは一連の断層崖に河川が切り込むと、各河川の谷口にあたる断層崖下には扇状地が連続的に形成される。このような一連の扇状地群を合流扇状地と呼んでいる。これらの扇状地群が隆起した結果水流によって下刻・開析され段丘化した地形がこの養老断層崖下の合流扇状地である。

ここでは本図幅内の台地を地形面高度、堆積物の組成及びその層相、開析状況などから次のように3段の砂礫台地に区分した。

- (1) 上位砂礫台地
- (2) 中位砂礫台地
- (3) 下位砂礫台地

しかしこれらの区分も便宜的であって他図幅の台地との対応関係はいまだ不

明のところが多い。

上位砂礫台地は本図幅においては養老断層崖下の徳田谷と羽根谷の一部に分布するのみで、その分布は局地的である。

中位砂礫台地は本図幅においては段丘及び合流扇状地の両台地からなる。段丘からなる台地は中位段丘の台地である。この中位段丘は養老郡上石津町時付近の牧田川右岸に分布する段丘面高度230～200mの段丘、上石津町多良付近の150～140mの段丘、上石津町川東付近の90～80mの段丘からなる台地である。この段丘崖の比高は30～20mで、段丘面の保存もよく、茶畑・桑畑や水田に土地利用されている。上石津町時と多良との間及び多良と川東との間には、いずれも約2km及び約2.5kmの狭さく部が存在するために、この区間で河床勾配が急になり、近距離にもかかわらず各々の段丘面の高度に著しい相違がみられるものと考えられる。

下位砂礫台地は本図幅においては段丘及び合流扇状地の両台地からなる。段丘からなる台地は下位段丘の台地である。この下位段丘は養老郡上石津町下山と多良及び一之瀬付近に分布する段丘で、下山付近における段丘面高度は180～170m、多良付近では130～110m、一之瀬付近では80～70mである。段丘崖の比高は数m以下である。上述したようにこれらの地域の間にはそれぞれ狭さく部が存在するために段丘高度に著しい相違が生じているものと考えられる。

ここでは記載の都合上、中位段丘と下位段丘からなる台地を便宜的にそれぞれ次のように(1)および(2)の2地域に区分した。また、合流扇状地からなる台地については、上位・中位・下位の3段の砂礫台地と現成の扇状地とが混在するので、便宜的に一括して次の(3)のように銘名した。

- (1) 多良段丘地域
- (2) 時段丘地域
- (3) 養老隆起扇状地群地域

(1) 多良段丘地域 (Ⅲa)

この地域は牧田川の中位段丘と下位段丘と現谷底からなる地域である。周

囲を山地と丘陵に囲まれた山間盆地に位置しているために台地でありながら鍋状の凹地を形成している。集落は段丘面に位置している。

(2) 時段丘地域 (Ⅲ b)

この地域は牧田川の中位段丘と下位段丘と現谷底からなる地域である。多良段丘地域と同様、周囲を山地と丘陵に囲まれた山間盆地に位置しているが、多良段丘地域とは奄芸垂層群からなる丘陵によって境された牧田川最上流部の山間盆地である。

(3) 養老隆起扇状地群地域 (Ⅲ c)

この台地は養老断層崖下に形成されている開析及び現成の合流扇状地からなる地域である。それ故にこの台地は現成及び化石の上位・中位・下位の砂礫台地からなる小規模な扇状地が混在する地域でもある。扇状地面の傾斜は約1/5~1/30の勾配で変化に富んでいる。それぞれの扇状地はその扇状地より新しい扇状地によって下端及び側端を下刻され段丘化している事例が多い。

扇状地は養老の滝の滝谷付近から盤若谷に至る地域に高密度にしかもこの地域としては規模の大きな扇状地が分布している。北部においては滝谷が、南部においては徳田谷、羽根谷が標識地になりうる。

この地域の扇状地は古くから人間の生活空間を提供してきたが、日常的な生活空間の場合は最近までは一部を除いて扇端部に限られてきた。しかし今日では最近まで林地として残されてきた扇中央部にまで工場などの進出による開発が行なわれ改変が進行している。

5 低 地

濃尾平野のように内湾に流入する大河川によって形成された沖積平野では沖積平野を構成する全ての微地形が帯域的に分布する場合が多い。それ故に次のような名称で区分されている地形帯域が上流部から下流部へかけて分布している。

(1) 扇状地帯域

(2) 自然堤防・後背湿地の卓越帯域

(3) 三角州帯域

これらの三帯域は、これ以上分解不可能な特徴的な微地形（単位地形）からそれぞれ成りたつ複合の単位地形の地域である。本図幅にはこれら三帯域の全てが位置する。各帯域を構成する単位地形についてはそれぞれの帯域の項で述べる。

沖積平野を流れる河川の流路形態は、扇状地帯域で網状流形態を示し、自然堤防・後背湿地の卓越帯域と三角州帯域で曲流形態を示す。従って本図幅においては往時からの治水工事による河川改修の影響でその形態に変化がみられるもののその「なごり」とどめている個所も認められている。このような環境下で、洪水、氾濫の都度形成された自然堤防はその規模において自然堤防・後背湿地の卓越帯域において顕著で規模的にも大きいものの、三角州帯域において小規模で低くなる。それ故に前帯域における自然堤防を高位自然堤防、後者を低位自然堤防と呼ぶ場合もある。

次に、本図幅内の各帯域について記述する。

(1) 扇状地帯域

山間地を流れる河川は沖積平野の河川に比べて水路幅も狭く、河床勾配も大きい。このような河川が沖積平野に流入するとその谷口において河床勾配も緩くなり、水路幅を拡大することも可能になるために、その水深も河床勾配も小さくなる。このためにいままで河流が維持していた掃流力を減少させ、運んできた物質をそこへ堆積させることになる。このような関係が谷口から沖積平野へ向って低部を選びながら繰り返されることによって谷口を頂点として、これらの堆積物からなる地形が広がるようになる。このような地形を上空から眺めると扇を開いたような形態で広がるので、扇状地と呼ばれるようになった。従ってこれらの扇状地は砂礫からなり、一般的には大規模扇状地ほどその勾配は小さくなる。

扇状地は洪水時の氾濫の繰り返しによって形成された地形であるからその水路沿いには大規模な自然堤防からなる扇状地面が形成されている。そして、

自然条件下では洪水による河道の変遷もはげしく、その河流は網状流を形成する。扇状地は砂礫からなるために一般的には乏水性の地域が扇中部にひろく分布し、このために一部は畑地・果樹園として土地利用されてきたものの、最近まで林地として残されてきた事例が多い。

本図幅内には牧田川扇状地が位置している。

a) 牧田川扇状地地域 (IVa)

この扇状地は養老郡養老町沢田付近を扇頂とし、養老町口ケ島付近を扇端とする傾斜勾配約 1/300 の扇状地であり、濃尾平野の傾動運動や養老断層の影響をうけ、木曽川や長良川の扇状地帯域と比べて高度的にも低く環境を異にしている。この扇状地の下流側、数kmに三角州帯域が位置していることからもうかがえるように他の扇状地帯域と比べて低湿である。この扇状地には河道変遷の跡をとどめる旧河道が残存している。

(2) 自然堤防・後背湿地の卓越帯域

濃尾平野の傾動運動と木曽川の砂礫の運搬堆積量の大きさを反映して本図幅内の単位地形は上流部の北東ないし北部において規模的にも大きく顕著であり、その配列形態も北東ないし北から、南西ないし南へ向って配列している。

この帯域の上限高度は約12mからはじまり傾斜は上流側で約 1/700、下流側で約 1/2500 まで変化している。この帯域には扇状地帯域の分流派川につながる小河川、扇状地の湧水帯に源流する小河川や蛇行流跡のようなすでに捨てられた旧河道などが本川の現河川とともに分布する。これらの河道沿いには過去の洪水、氾濫時に堆積した砂質土からなる比高 1~3 m の微高地である自然堤防が分布する。この帯域が自然堤防・後背湿地の卓越帯域なる名称をつけられたのもこの特徴的な自然堤防が旧河道や河道沿いに顕著に分布することによったものと思われる。上述したように濃尾平野の傾動運動の影響を反映して自然堤防の分布にも偏在性が認められ東方ほど顕著で大規模になるが西端部に位置する揖斐川右岸では著しく少ない。

自然堤防と自然堤防とはさまれた区域は、河川の氾濫時には湛水し、その時に堆積した泥質土からなる皿状の凹地地形を形成し特に低いところは湿地になっている。これが後背湿地の地形である。本図幅ではこの後背湿地は氾濫平野で表現した。

従ってこの帯域は河道、旧河道、自然堤防、後背湿地などの単位地形からなりたっている。それ故にこれらの単位地形は洪水時の氾濫に深く係わり合う地形であり、この帯域が水との係わりあいから生れた帯域であるといえる。見方を変えれば、この帯域は洪水時の水害常習地にあたる地域であり、それ故に輪中なる人工地形の卓越する地域でもある。

本図幅内には次の地域が位置する。

- a) 長良川東方地域
- b) 長良川西方地域

a) 長良川東方地域 (Ⅳb)

この地域の上流端は各務原市と岐阜市の境界線にほぼ一致し、高度的には約12m～8mに位置しているが、本図幅にはこの地域の下流部が位置する。この帯域の単位地形の一つである自然堤防は長良川西方地域と比べて規模的にも大きく密度的にも高い。特に長良川西方地域のうちの揖斐川以西域と比べるとその差異は顕著である。

b) 長良川西方地域 (Ⅳc)

この地域の上流端は大垣市～岐阜市に位置し、高度的には約12mに位置しているが本図幅にはこの地域の下流部が位置する。濃尾平野の傾動運動と木曾川による掃流物質の大きさを反映して、自然堤防の規模・分布頻度も揖斐川をはさんでその差異は顕著である。更に西側ではその配列方向にも相異がみられる。

(3) 三角州帯域

自然堤防・後背湿地の卓越帯域の下流側には養老郡養老町、海津郡平田町

を上限とする三角州帯域が分布する。東高西低の濃尾平野の傾動運動を反映して、この三角州帯域は本図幅内において著しく北上し、西に偏在する分布傾向を示す。

三角州をつくる構成層は上流側から頂置層、前置層、底置層であるが、本図幅の地域は三角州頂置層からなる地形域である。このことからもうかがえるように縄文海進時にはこの帯域は浅海性の伊勢湾によって内湾化され、この内湾は大垣市のあたりまで北上し、拡大していた。そしてその時期に沖積中部泥層（南陽層）なる厚い泥層を堆積させた。その後の海水準の多少の低下にとまらぬ河川の延長によって三角州を前進させ陸化した帯域である。その時の堆積物が三角州前置層及び三角州頂置層であり、これらの地層が沖積中部泥層の上に堆積している。

この帯域は木曾三川によって運ばれ河口部に堆積した細粒の掃流物質によって除々に陸化した地形域であるために著しく低湿で平坦化した帯域である。このような自然環境のためにこの帯域の唯一の高燥地は自然堤防であり、この自然堤防が古くから集落や畑に利用されてきた。自然条件下ではこの自然堤防がこの帯域における海面上に達する唯一の地形であるが、この帯域より上流側に位置する氾濫平野に分布している自然堤防と比較するとこの自然堤防は規模的にも小さく、連続性もよくない。このために前者の自然堤防を高位置自然堤防、後者を低位自然堤防と呼ぶ場合もある。自然堤防に挟まれた地域は皿状の低湿地からなる三角州であり、とくに低いところがヨシやガマの密生する低湿地や沼地になっている。

この帯域における河川は著しく曲流し、随所に曲流状の旧河道や三日月湖を残している。また地下水面は著しく浅く数10cm未満である。このために水田は湿田化している。

本図幅内には長良川西方地域の下流部にあたる南半部にこの三角州帯域（長良川西方三角州地域）が分布している。

a) 長良川西方三角州地域（Ⅳd）

この帯域は北限を養老町下笠から横屋付近にもち、養老断層と濃尾平野の

傾動運動の結果を反映させて養老断層崖沿いに北西から南東方向にひろがっている。北限においても海拔高度は1 m以下で、著しく低湿で、しかも沼池及び旧河道などの分布密度が高い。自然堤防はいわゆる自然堤防帯のそれと比べて規模的にも密度的にも小さく少ない。

6 資 料

- 愛 知 県 (1975) : 愛知県土地分類基本調査 (桑名・名古屋南部)
- 井関弘太郎 (1962) : 沖積平野研究の基礎的問題点
名古屋大学文学部研究論集 No.26
- 〃 (1969) : 濃尾平野の地史 名古屋地盤図
- 〃 (1981) : 縄文時代の海面変動と平野の形成 地理 26—9
- 海津 正倫 (1979) : 更新世末期以後における濃尾平野の地形発達過程
地理学評論 52—4
- 嘉藤良次郎 (1957) : 養老山脈南縁の地質構造および鈴鹿山脈の形成
地質学雑誌 63—743
- 岐 阜 県 (1983) : 土地分類基本調査 (大垣)
- 〃 (1984) : 土地分類基本調査 (岐阜)
- 木村 一朗 (1971) : 伊勢湾西岸地域の中位段丘
竹原平一教授記念論文集
- 桑原 徹 (1968) : 濃尾盆地と傾動地塊運動 第四紀研究 7 卷
- 桑原 徹・他(1972) : 伊勢湾と周辺地域の埋没地形と第四系
地質学論集 No.7
- 武久 義彦 (1979) : 鈴鹿山脈東麓の活断層
奈良女子大地理学研究報告
- 古川 博恭 (1972) : 濃尾平野の沖積層 地質学論集 No.7
- 松井 寛 (1966) : 奄芸層群暮明層の碎屑物の供給方向
松下 進教授記念論文集
- 森 一郎・山田 純 (1977) : 一志断層系による段丘変位 (予報)
三重大学教育学部研究報告 28

- 森山 昭雄 (1972) : 沖積平野の微地形 地質学論集 No. 7
横山 卓雄 (1971) : 鈴鹿山脈の形成 (その1) 三重県員弁郡の鮮新更新
統を中心にして 竹原平一教授記念論文集

(岐阜大学教育学部 関根 清)

Ⅱ 表層地質

1 表層地質概説

本図幅地域は、濃尾平野、養老山地、牧田低地帯、鈴鹿山脈北部にまたがっている。

図幅内の養老山地と鈴鹿山脈北部は中・古生界よりなる。この中・古生界については、古くから研究され、石灰岩中から産出する化石によって、すべてが古生代ペルム紀のものとしてされてきたが、1970年代以降、コノドンド、放射虫等の微化石の研究が進み、チャート層の大部分が中生代三畳紀に、泥質岩層と砂岩層のほとんどが中生代ジュラ紀に堆積したものであることが判明してきた。

そのため、地質構造の解釈についても大きく変更をせまられた。

堆積年代を異にする地層が並走して分布する場合には、その境界は低角断層あるいは平行不整合でなければならない。本図幅内においては、その境界は、低角断層である場合が多いが、その部分は固結している場合が多いので一部を除いては、断層として表示しなかった。また走向傾斜については、中・古生界各岩層は小規模褶曲をくり返すことが多く、地層の分布のひろがりを知る上で走向は意味をもつものの、傾斜は統計的処理をほどこさない限り意味を持たないので表示しなかった。

牧田低地帯には、鮮新～更新統に属する奄芸層群米野累層および大泉累層が分布する。奄芸層群最上位層の米野累層は主として大～中礫層からなり、中位層の大泉累層は砂・礫も含むが粘土を主体とする地層で亜炭層を含んでいる。両者とも半固結程度の堅さを持ち丘陵地を形成する。

牧田川沿岸および養老山地東麓沿いには、新旧の河岸段丘が存在するが扇状地堆積物とともに、未固結の礫がち堆積物（g）として一括して表示した。平野部には、長良川、揖斐川水系のもたらした泥がち堆積物（m）が広く分布し、旧河道沿いに形成された砂がち堆積物よりなる微高地の自然堤防が点在する。

2 表層地質細説

(1) 未固結堆積物

a) 礫がち堆積物 (g)

礫がち堆積物は、牧田川が平野部に出る所で勾配の急激な減少により生じた扇状地堆積物と、養老山地よりもたらされ、その東麓に分布する小扇状地群および低・中・高の各段丘群を構成する堆積物、さらには牧田川沿いの山間低地の河川堆積物を一括して表示した。

これらの堆積物は、主として中・古生界由来の砂岩・チャート・泥質岩の大～中礫を主体し、ときには巨礫をまじえている。

円磨度は低く角礫～亜角礫である。淘汰もよくない。

固結度は一般にゆるいが、高位段丘堆積物には、半固結堆積物程度の膠結を示すものもある。

b) 砂がち堆積物 (s)

長良川、揖斐川水系の旧河道沿いに形成された自然堤防の堆積物で微高地を形成している。現揖斐川以東では、分布も広く連続性もよいのにたいし、揖斐川以西では規模が小さく点在している。また、揖斐川以東の自然堤防がほぼ南北性の方向をもって分布しているのにたいし、以西のものは東西性の方向をもってしている。これらのことは、揖斐川本流の位置が比較的古い時代に固定されたことを物語っている。

c) 泥がち堆積物 (m)

前記の自然堤防の後背湿地には泥がち堆積物が広く分布する。

地下数m以下は、柱状断面図に示されるように、平野の形成史を反映して、砂がち、礫がち堆積物に複雑に移り変わる。

自然堤防にくらべ低く、大雨、破堤の場合浸水の危険が多い。

d) 碎屑物 (cl)

養老山地東崖に沿って分布するものと、一志断層群の各断層崖に沿って分布するものがある。

主に中・古生界由来の砂岩、チャート、泥質岩の大～巨礫からなり、花崗斑岩の礫もまじえている。角礫よりなり扇状地堆積物、または段丘堆積物を覆う場合、その境界は明瞭ではない。主に地形的特徴にもとづいて分類した。

(2) 半固結堆積物

a) 礫および粘土 (gc)

奄芸層群最上位の米野累層がこれにあたる。本図幅地域内では、上石津町谷畑から時にいたる山麓斜面上に、「粘土・砂および礫 (cs)」を覆って分布する。その西限は一志断層によって限られる。

主として大～中礫層からなる。淘汰は悪く、基質の量は少ない。礫種は、中・古生界由来の砂岩礫が50%を占め、他に泥質岩、チャート、石英斑岩などの礫を含んでいる。

b) 粘土・砂および礫 (cs)

奄芸層群大泉累層に相当するものである。本図幅地域内では、上石津町一之瀬から時にいたる牧田川沿いの丘陵地に分布する。

主として、青緑色あるいは灰白色の塊状粘土層からなり、礫層、砂層をはさむ。南部と北部では幾分層相が異なる。一般には、北部ほど礫層が多く、南部ほど砂層および粘土層が多くなる。

上石津町宮より西方に溯る沢では厚さ2～10mの礫層と厚さ1～5mの粘土層の互層よりなる本層が露出し、2層準に厚さ10～20cmの亜炭層がはさまれている。

礫層は大～中礫が多く、円磨されている。礫種は泥質岩・砂岩・チャートが多い。粘土層は青灰色ないし灰色で流木を含むことが多い。

(3) 固結堆積物

a) 砂岩 (ss)

本図幅地域内における固結堆積物中最大の分布を示す。

泥質岩の薄層をはさむものもあるが、一般に塊状無層理で、中～細粒で泥質岩のパッチを含むものが多い。本来、暗灰色であるが風化した部分は黄灰色となる。強堅な岩石で、砕石原材として最適なものであるが、深層風化し脆弱となっている部分もある。風化殻の厚さは、岐阜図幅地域内の砂岩にくらべ薄く、20m前後のところが多い。

b) 泥質岩 (sh)

泥質岩は、大岩体をなし帯状分布するものと、砂岩分布域に細い帯状に分布するものがある。いずれも、本来灰黒色で強堅な岩石であるが、剥離性をもつため、風化されやすく砂岩にくらべ脆弱になり斜面の急な所では崩壊地となることが多い。

養老山の南側に北西―南東方向に見掛上500mの幅で分布するものは珪質になっており、中部ジュラ紀を示す放散虫化石の産出が報じられている。

三国岳北西に分布するものは、チャートの薄層を多くはさみ、凝灰質のところもみられる。

c) 砂岩・泥質岩互層 (ms)

垂井町象鼻山付近に分布する。塊状砂岩と泥質岩が厚さ数mないし数10mの粗い互層をなしている。砂岩は粗粒～中粒で概して砂岩の方が粘質岩よりも厚い。砂岩の厚層部は砕石原材として大量に採取されている。

d) 珪岩 (ch)

一般にチャートと呼ばれている本岩は、大岩体をなし帯状に分布するものと、砂岩、泥質岩等にはさまれて小規模なひも状に分布するものがある。

大岩体をなす場合は、強堅な岩石であるため急峻な山嶺部を構成することが多い。

暗灰色、灰色、白色、赤色等さまざまな色を呈する。厚さ数cmの層理をもち、小褶曲していることが多い。

産する微化石から三疊紀の海底堆積物であることが知らされている。

e) 石灰岩 (ls)

本図幅地域内の石灰岩は養老町上方西方にまとまった分布するもの以外は、輝緑凝灰岩 (sch)、珪岩 (ch) 分布域中に点在するにすぎない。灰黒色のものが多く、含まれる化石より古生代ペルム紀に堆積したものであることが知られている。しかし、密着する周囲の地層がより若い年代のものであることから、これらの石灰岩は異地性のものとされている。

f) 輝緑凝灰岩 (sch)

一般に、赤褐色、または緑灰色を呈し、溶岩と凝灰岩からなる。溶岩は杏仁状溶岩で、養老町龍泉寺西方の谷でみられるものは石灰岩の偽礫を部分的に含み層状またはレンズ状の石灰岩およびチャートをはさむ。

その他の地域でも、輝緑凝灰岩と石灰岩は密接に伴うことが多く、石灰岩と同時代の異地性の岩体と考えられる。

本来は強堅な岩石であるが、風化されやすく、ボロボロになり、時には濃色の粘土になっている。

3 資 料

- 1) 石田 志朗・横山 卓雄 (1969) 近畿東海地方の鮮新・更新, 更新統火山灰層序及び古地理・構造発達史を中心とした諸問題, 第四紀研究, vol. 8, p.31—34.
- 2) 鹿沼茂三郎・入江 和彦 (1956) 岐阜県養老山地の地質, 東京学芸大学研究報告, vol.13, p.211—217.
- 3) 鹿沼茂三郎 (1957) 岐阜県南部美濃山地の二疊系礫岩について, 東京学芸大学研究報告, vol. 7, p.99—104.
- 4) 川口 一郎・柴田 賢 (1982) 養老山地中部のジュラ紀珪質泥岩—その年代について, 日本地質学会第88学術大会講演要旨, p.153.
- 5) 河内 睦雄 (1967) 濃尾平野北東縁の第四系, 早坂一郎記念論文

- 集, p.337—342.
- 6) 経済企画庁総合開発局国土調査課 (1973) 中部圏地下水 (深井戸) 資料台帳. 1597p.
 - 7) 建設省中部地方建設局中部技術事務所 (1978) 濃尾平野の地盤資料付図集.
 - 8) 水谷伸治郎 (1965) 伊吹山東部の古生層. 名古屋地学, Nos.20—21.
 - 9) 宮村 学・三村 弘二・横山 卓雄 (1976) 彦根東部地域の地質. 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 49p.
 - 10) 森 一郎 (1973) 養老山地内部の鮮新更新統. 名古屋地学, no.30, p.16—26.
 - 11) 森 一郎 (1975) 養老山地内部の鮮新更新統 (続報). 名古屋地学, no.31, p.10—25.
 - 12) 森 一郎 (1977) 南宮山・関ヶ原地域の鮮新更新統. 地学研究, vol.28, p.405—416.
 - 13) 高田 康秀・近藤 善教・宮村 学 (1979) 津島地域の地質. 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 56p.
 - 14) 竹原 平一 (1961) 伊勢湾西岸の奄芸層群層序. 榎山次郎教授記念論文集, p.45—50.
 - 15) 脇田 浩二 (1985) 美濃帯中・古生界における研究史と最近の研究動向. 地球科学, vol.39, no.1, p.18—30.

(岐阜大学教育学部 梶田 澄雄)

Ⅲ 土 壤

1 山地、丘陵地域の土壌（林地土壌）

山地、丘陵地は、三重、滋賀県境に近い西部に広がっており、西部の大部分を占める。山地は、養老山地と鈴鹿山地で、稜線が約800～900mの高度で連なり、最高点は滋賀県との県境にあり海拔992mである。地質は、主に中生界の砂岩、泥質岩、チャートからなっている。丘陵地は、主に養老山地と鈴鹿山地の間を流れる多良川沿いに広がる。地質は、主に新第三紀から新第四紀の半固結堆積物からなっている。

本図に出現する土壌は、褐色森林土群で本地域の地形、地質と密接な関係を示す土壌が分布している。褐色森林土群は、母材、堆積様式、断面形態の特徴等により表一1に示すとおり5土壌統群、12土壌統に細分できる。

(1) 乾性褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌には、貝戸1統、養老1統、志賀谷2統の3統が含まれる。

貝戸1統は、主として中生界の砂岩、泥質岩、チャートを母材とし、山地の尾根に分布する埴質壤土を主とする土壌である。この統は、乾性型（BA、BB）よりも弱乾性型（BC）の土壌が多く分布する。A_o層は、乾性型土壌ではF層、H層が厚く、弱乾性型土壌では薄い。A層は、薄く、粒状構造又は堅果状構造の場合が多い。B層は、堅密で、堅果状構造が発達する場合が多い。植生は、コナラ、クリ、リョウブ等の落葉広葉樹林が多く分布している。下層植生は、ササ類、ツツジ類、ネジキ等が多い。この統は、本図の西部、鈴鹿山地に分布し、養老郡上石津町、不破郡関ヶ原町に分布している。

養老1統は、主として中生界の砂岩、チャートを母材とし、山地尾根、斜面上部に分布する埴質壤土から壤土の土壌である。この統は、山地尾根では乾性型土壌、斜面上部では弱乾性型土壌となる傾向がある。A_o層は、10cm程度と厚く堆積する場合が多い。A層は、薄く、時にA—B層となり、粒状構造が発達する場合が多い。B層は、堅果状構造が発達することが多く、赤

表一 土壤統一覽表

土壤群	土壤統群	土壤統	母材	地形
褐色森林土	乾性褐色森林土壤	貝戸 1 統	中生界砂岩、泥質岩、チャート等	山地尾根
		養老 1 統	中生界砂岩、チャート等	山地尾根、斜面上部
		志賀谷 2 統	中生界砂岩、泥質岩等	丘陵尾根、斜面上部
	乾性赤色系褐色森林土壤	奥 統	中生界砂岩等	山地尾根
		庭田 統	中生界砂岩、チャート等	丘陵尾根、斜面上部
		多良 統	新第三紀更新世～新第四紀鮮新世の半固結堆積物	丘陵尾根、斜面上部
	褐色森林土壤	貝戸 2 統	中生界砂岩、チャート等	山地斜面
		養老 2 統	中生界砂岩、チャート等	山地斜面中、下部
		志賀谷 3 統	中生界砂岩、泥質岩等	丘陵斜面中、下部
		川西 統	新第三紀更新世～新第四紀鮮新世の半固結堆積物	丘陵斜面中、下部
	黄色系褐色森林土壤	時 統	新第三紀更新世～新第四紀鮮新世の半固結堆積物	丘陵斜面中、下部
	湿性褐色森林土壤	貝戸 3 統	中生界砂岩、チャート等	谷底低地、谷頭

色風化の影響により赤味が強い場合もある。礫は、角礫で、A層、B層上部には比較的少ないが、B層下部で多くなる傾向がある。植生は、アカマツ林となることが多く、マンサク、ソヨゴ、アラカシ等の広葉樹が混交し、下層にはヒカサキ、ツツジ類、イヌツゲ等が多い。この統は、養老山地、鈴鹿山地に比較的広く分布し、海津郡南濃町、養老郡養老町、上石津町、不破郡関

ケ原町に分布する。

志賀谷2統は、主として中生界の砂岩、泥質岩を母材とし、丘陵尾根、斜面上部に分布する埴質壤土から壤土の土壌である。A_o層は、比較的薄いものから厚いものまでみられる。A層は、薄く、比較的黒味が強く、粒状構造又は堅果状構造の場合が多い。B層は、堅果状構造の場合が多い。礫は、わずかに風化した半角礫で、B層上部までは少ないがB層下部で多い。植生は、天然林ではアカマツ林又はアカマツ林にコナラ、クリ、アラカシ等の広葉樹が混交した林分が多く、ヒノキの人工林がわずかに分布する。下層植生は、ヒサカキ、シシガシラ、ワラビ、ヤマハギ等が多い。この統は、丘陵地に小面積分布し、海津郡南濃町、養老郡養老町、上石津町、不破郡垂井町、関ヶ原町に分布している。

3土壌統は、BA、BB、BCに相当するが、BAは少なく、BB、BCが多い。鉱質土層への腐植の浸透が悪く、生産力が低い土壌である。生産力が低い為、人工造林には不向きな土壌である。

(2) 乾性赤色系褐色森林土壌

乾性赤色系褐色森林土壌には、奥統、庭田統、多良統の3統が含まれる。

奥統は、主として中生界の砂岩を母材とし、山地の尾根に分布する埴質壤土から壤土の土壌である。A_o層は、約10cmと厚く、特にF層がよく発達する傾向がある。A層は、腐植に富み黒味が強く、大きな孔隙が多く、粒状構造が発達し、菌糸が分布することが多い。B層は、粒状構造、堅果状構造、塊状構造となっており、赤色風化の影響で赤褐色を呈する。鉱質土層では、角礫が多く、B層下部では著しく多い。植生は、コナラ、リョウブ、エゴノキ、ネジキ等の落葉広葉樹にアカマツが混交することが多く、生長が悪く矮性である。下層植生は、ツツジ類、シロダモ、ミヤマシキミ、イヌツゲ等が多い。この統は、鈴鹿山地の小面積に分布し、養老郡上石津町、不破郡関ヶ原町に分布する。

庭田統は、主として中生界の砂岩、チャートを母材とし、丘陵尾根、斜面上部に分布する埴質壤土から壤土の土壌である。A_o層は、比較的薄いのが、

時にF層が厚く発達する場合がある。A層は、あまり発達せず、浅く、腐植の浸透が少なく淡い色のものが多い。構造は粒状構造が多い。B層は、赤色風化の影響を受けて赤褐色を呈している。構造は、粒状から堅果状構造のものが多い。植生は、大部分アカマツ林である。下層植生は、アラカシ、ヒサカキ、リョウブ、ウラジロ、コシダ、ナツハゼ等が多い。図中の南部に小面積分布し、海津郡南濃町に分布している。

多良統は、新第三紀更新世から新第四紀鮮新世の半固結堆積物を母材とし、丘陵尾根、斜面上部に分布する埴土から埴質壤土の土壌である。この統は、赤色風化の影響を受けた乾性赤色系褐色森林土壌が大部分であるが、場所によって黄色風化による乾性黄色系褐色森林土壌が混在する。A_o層は、5 cm 以下と比較的薄い場合が多い。A層は深く、孔隙が多く、堅果状から粒状構造で、腐植の浸透が少ない淡い色である。B層は、堅果状構造が多く、赤褐色を呈する場合が多い。礫は、円礫で少ない傾向である。植生は、矮性のアカマツ林となることが多く、コナラ、ソヨゴ等の広葉樹が混交する。下層植生は、シキミ、ヒサカキ、ウラジロ、コシダ等が多い。この統は、養老郡上石津町に分布する。

3土壌統は、主にrBA、rBB、rBCに相当し、極めて生産力の低い土壌であり、人工造林には不向きである。

(3) 褐色森林土壌

褐色森林土壌には、貝戸2統、養老2統、志賀谷3統、川西統の4統が含まれる。

貝戸2統は、主として中世界の砂岩、チャートを母材とし、貝戸1統に伴って山地斜面に分布する、壤土から埴質壤土の土壌である。A_o層は、ほとんど発達せず、L層が薄く堆積する程度である。A層は、厚く、腐植がよく浸透し、団粒状構造がよく発達する。B層は、塊状構造又は特に構造がない場合が多い。礫は、角礫でA層、B層ともに多い傾向である。植生は、人工林ではスギ林、天然林ではケヤキ、ホオノキ、アカメガシワ、アラカシ等の広葉樹林が多く、生育が良好である。この統は、鈴鹿山地に分布し、養老郡上

石津町、不破郡関ヶ原町に分布する。

養老2統は、主として中生界の砂岩、チャートを母材とし、養老1統に伴って山地の斜面中、下部に分布する。壤土から砂質壤土の土壤である。A₀層は、場所によってはL層が厚く堆積する場合があるが、F層、H層はほとんど堆積しない。A層は、団粒状構造が発達するがあまり厚くはならない。B層は、角礫が比較的多く、構造が団粒状構造、塊状構造、特になしと様々である。場所によっては赤色風化の影響がみられる。植生は、人工林ではスギ、ヒノキ林となっておりヒノキが多く、天然林ではアラカシ、コジイ、コナラ等の広葉樹林である。下層植生は、シロダモ、コアジサイ、キイチゴ類、シロモジ、ササ類等が多い。この統は、林地土壤では最も広く分布し、養老郡養老町、上石津町、不破郡関ヶ原町に分布する。

志賀谷3統は、主として中生界の砂岩、泥質岩を母材とし、志賀谷2統に伴って丘陵斜面の中、下部に分布する埴質な土壤である。A₀層は、ほとんど発達せず、L層が薄く堆積する程度である。A層は、角礫が多く、団粒状構造が発達し、層が比較的厚い。B層は、角礫が多い場合が多く、場所によっては赤色風化の影響がみられる。植生は、人工林ではスギ、ヒノキ林で、天然林ではコナラ、クリ、サクラ類等の落葉広葉樹林が多い。下層植生は、ササ類、チャ、エゴノキ、ヒサカキ、イヌツゲ等が多い。この統は、養老郡養老町、上石津町、不破郡垂井町、関ヶ原町に小面積分布する。

川西統は、主として新第三紀更新世から新第四紀鮮新世の半固結堆積物を母材とし、丘陵斜面の中、下部に分布する埴土から砂質壤土の土壤である。A₀層は、ほとんど発達しない。A層は、比較的砂質分が多く、層が薄く、団粒状構造から一部堅果状構造となることが多い。B層は、円礫又は半角礫が多く、塊状構造から団粒状構造となることが多い。赤色風化の影響を受け赤味が強い傾向である。場所によっては黄色風化の影響も認められる。植生は、スギ、ヒノキの人工林が多いが、天然林ではコナラ、クリ、アカメガシワ、ヌルデ等の落葉広葉樹林となる。下層植生は、ウラジロ、アオキ、アセビ、シキミ、ササ類、フユイチゴ等が多い。この統は、養老郡上石津町に分布する。

4 土壌統は、主に B_D、B_D(d) に相当し、生産力の高い土壌で、人工造林に適する地域である。生産力は、貝戸 2 統が他の 3 統に比べて高い。

(4) 黄色系褐色森林土壌

黄色系褐色森林土壌には、時統が含まれる。

時統は、主として新第三紀更新世から新第四紀鮮新世の半固結堆積物を母材とし、丘陵斜面の中、下部に分布する埴質壤土から壤土の土壌である。A_o層は、薄い L 層が堆積することが多い。A 層は、比較的厚く、団粒状構造に一部堅果状構造が混じることが多い。B 層は、塊状構造となる場合が多く、黄色風化の影響を受けて黄褐色を呈することが多い。場所によっては、赤色風化の影響により赤褐色の土壌が混在する場合が認められる。鉱質土層では、礫が多く、半角礫が多い傾向である。植生は、人工林ではスギ林が多く、天然林ではエゴノキ、カラスザンショウ、コナラ等の落葉広葉樹林となる場合が多い。下層植生は、アラカシ、シキミ、ムラサキシキブ、コアジサイ等が多い。この統は、主に y B_D、y B_D(d) に相当するが生産力は比較的高く、褐色森林土壌の養老 2 統、志賀谷 3 統、川西統と同じくらいである。この統は、養老郡上石津町に分布している。

(5) 湿性褐色森林土壌

湿性褐色森林土壌には、貝戸 3 統が含まれる。

貝戸 3 統は、主として中世界の砂岩、チャート之母材とし、谷底低地、谷頭に分布する砂質壤土の土壌である。A_o層は、L 層と薄い F 層が堆積する場が多い。A 層は、50cm 以上と厚く、団粒状構造が発達する。角礫が多く、孔隙が多い。植生は、スギ人工林又はケヤキ、ヤマハンノキ、ヤナギ類、カエデ類等の落葉広葉樹林である。下層植生は、ツリフネソウ、ササ類、イタドリ、リュウメンシダ、フユイチゴ等が多い。この統は、BE に相当し、極めて生産力が高い。鈴鹿山地に分布し、養老郡上石津町、不破郡関ヶ原町に分布している。

(岐阜県林業センター 野々田三郎)
 (〃 中川 一)
 (〃 川尻 秀樹)

2 台地及び低地の土壌

(1) 農地土壌概説

この地域は、不破南部一養老一大垣・安八南部一羽島一海津にわたり、美濃平野の西南部に位置する。低地の中央部を揖斐、長良、木曾の三川が南下し、養老西部の台地から牧田川が、揖斐川に入り込んでいる。

美濃平野は、古代は伊勢湾の一部であったが、木曾三川の水積と、海底隆起によって平野となったものである。当低地は、増水のととき水底に没するおそれがある、所々に築堤で囲んだ大小の輪中の集落ができています。輪中では、水田の4～5割を掘りつぶして盛土し、畦を作って耕地にしたため、堀池や、水路が多かった。

土 壌 群	土 壌 統 群	土壌統群番号	主な土地利用
岩 屑 土	岩 屑 性 土 壌	0 1	畑
黒ボク土	厚層黒ボク土壌	0 3	畑
	黒ボク土壌	〃	〃
	多湿黒ボク土壌	0 4	水田
赤黄色土	黄 色 土 壌	1 0	畑、水田
褐色低地土	褐 色 低 地 土 壌	1 2	〃 〃
灰色低地土	細粒灰色低地土壌	1 3	水田
	灰 色 低 地 土 壌	〃	水田、畑
	粗粒灰色低地土壌	〃	水田
グライ土	細粒グライ土壌	1 4	水田
	グ ラ イ 土 壌	〃	〃
	粗粒グライ土壌	〃	〃
泥 炭 土	黒 泥 土 壌	1 5	水田

近年は、この地域において、サンドポンプの埋めたて等による土地基盤整備が進み、大区画ほ場の造成や、一部用排水分離等が行われ、水田地帯に施設園芸などの作目も導入され、農業振興の活動が活発である。

この地域に分布する土壌は、母材、堆積様式、断面形態などから、前表の7土壌群、13土壌統群に分類される。

(2) 農地土壌細説

岩屑土 (01)

養老山地の山麓傾斜面に分布し、樹園地（茶園を含む）としての利用が多い。非固結水成岩を母材とする崩積性の土壌で、表層から礫にとみ、排水はきわめて良好で過乾のおそれがある。土壌は浅く保水性に劣り、土壌の生産力は低く、土づくりのため、有機物の施用が必要である。

黒ボク土 (03、04)

同じ洪積台地に分布し、大部分は普通畑や樹園地（茶園を含む）で、多湿黒ボク土壌 (04) は水田に利用される。非固結水成岩を母材とする洪積あるいは水積性の土壌で、土性は表層、次層ともに強粘質～粘質、下層に礫層が出現する場合もある。腐植層は、全層または表層多腐植で、埋没土層の場合もある。黒ボク土壌においては保水性が大きく、過乾のおそれは少ないが、磷酸の吸収固定がきわめて大きく、また土壌の生産力は低水準である。一方、多湿黒ボク土壌では磷酸吸収力が大きく有効態磷酸及び、可溶性けい酸に乏しい。塩基置換容量は大きい、塩基の保持力が弱く、塩基類が溶脱しやすい、ため、土壌改良資材を積極的に補給する必要がある。

黄色土 (10)

上と同じ洪積台地に分布し、普通畑や樹園地に、一部では水田に利用されている。非固結水成岩を母材とする崩積または残積性の土壌で、土性は表層、次層とも強粘質～粘質である。下層は一般にち密で透水性が不良、保水性は中～良であるが、雨期には湿害、夏期及び冬期の乾燥期には干害を受けやすい。土色は黄であり、腐植に乏しい。土壌の生産力は高くないので、有機物と石灰、苦土の補給に努める。

褐色低地土 (12)

沖積低地に分布するが、灰色低地土よりやや高い地形で、普通畑に、一部では水田として利用される。非固結水成岩を母材とする水積性の土壌で、土性は表層、次層とも壤質であることが多いが、次層が強粘質～粘質の場合もあり、一部礫層も出現する。土色は黄褐であり、腐植に乏しく、透水性は大きい。土壌の生産力は低～中程度であるので、土づくりには有機物と石灰、苦土の補給を図る。

灰色低地土 (13)

沖積低地の、谷底平野から河川の氾濫平野に広く分布し、平担で水田として利用されるが、一部は普通畑としての利用もある。非固結水成岩を母材とする水積性の土壌で、土性は表層が強粘質から砂質まで、次層は強粘質から砂礫質までである。土色は灰であるが、灰褐のこともあり、腐植に乏しく、透水性は比較的大きい。水田においては、乾田が大部分を占め、保肥力は上～中程度で透水性が大きいことから、塩基等養分含量は乏しい。畑地では、保肥力及び保水性がやや小さく塩基等養分含量が乏しい。土壌の生産力は中程度であるので、土づくりに稲わら等の秋冬すき込みを行う。

グライ土 (14)

沖積低地の、谷底地や河川の氾濫原に広く分布し、平担で水田として利用される。非固結水成岩を母材とする水積であるが、一部に下層泥炭の集積した土壌もある。土性は表層が強粘質または壤質、次層は強粘質から砂礫質までである。土色は青灰で、全般的に地下水位は高く、グライ層は30cm以内よりも下部に、もしくは30～60cm以内より下部にあるが、全層に出る場合もある。湿田ないし半湿田に属するので根腐れに注意し、地表排水及び暗きよ排水に努める。

泥炭土 (15)

沖積低地にある輪中の沼地の周辺に分布し、水田として利用される。ヨシ、スゲ等の植物遺体を母材とする集積性の土壌で、土性は表層、次層ともに強粘質または壤質である。腐植層序は表層多腐植のもの、表層腐植層のないものがある。本地域の土壌は黒泥があり、泥炭のある場合と、ない場合があ

る。湛水透水性が小さく、グライ層は作土または作土直下に出現する。湿田に属するので、暗きよ等による排水対策は根ぐされ防止に有効である。

3 資 料

- 1) 岐阜県農業試験場（1977） 水田および畑地土壌生産性分級図
- 2) 岐阜県農政部（1978） 地力保全基本調査に基づく土壌管理方針
- 3) 農業技術研究所化学部土壌第3科（1983） 農耕地土壌の分類
土壌統の設定基準および土壌統一覧表 第2次案改訂版

（岐阜県農業試験場 渡部 和雄）

市町村別、土壌統群面積一覧表

(1) 水田の部

市町村名	土 壌 群	土 壌 統 群	土壌統群番号	分布面積(ha)
大 垣 市	黒ボク土	黒ボクグライ土壌	05	100
	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	1,307
		灰色低地土壌	〃	443
		粗粒灰色低地土壌	〃	93
	グライ土	細粒グライ土壌	14	821
		グライ土壌	〃	177
		粗粒グライ土壌	〃	69
羽 島 市	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	399
		灰色低地土壌	〃	721
	グライ土	細粒グライ土壌	14	162
		グライ土壌	〃	798
海 津 町	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	30
		灰色低地土壌	〃	221
	グライ土	細粒グライ土壌	14	805
		グライ土壌	〃	794
	黒泥土	黒泥土壌	15	140
平 田 町	灰色低地土	灰色低地土壌	13	105
	グライ土	細粒グライ土壌	14	359
		グライ土壌	〃	394
南 濃 町	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	122
		灰色低地土壌	〃	10
		粗粒灰色低地土壌	〃	20
	グライ土	細粒グライ土壌	14	477
		グライ土壌	〃	200
養 老 町	黄色土	黄色土壌	10	60
	灰色低地土	灰色低地土壌	13	80

市町村名	土 壌 群	土 壌 統 群	土壌統群番号	分布面積(ha)
養 老 町	灰色低地土	粗粒灰色低地土壌	13	367
	グ ラ イ 土	細粒グライ土壌	14	1,642
		グ ラ イ 土 壌	〃	340
		粗粒グライ土壌	〃	371
上 石 津 町	黒ボク土	多湿黒ボク土壌	04	25
	黄 色 土	黄 色 土 壌	10	13
	褐色低地土	褐色低地土壌	12	190
	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	75
		灰 色 低 地 土 壌	〃	41
		粗粒灰色低地土壌	〃	136
	グ ラ イ 土	細粒グライ土壌	14	30
		グ ラ イ 土 壌	〃	19
粗粒グライ土壌		〃	47	
垂 井 町	黒ボク土	多湿黒ボク土壌	04	12
	黄 色 土	黄 色 土 壌	10	85
	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	130
		灰 色 低 地 土 壌	〃	60
		粗粒灰色低地土壌	〃	283
	グ ラ イ 土	細粒グライ土壌	14	370
		グ ラ イ 土 壌	〃	32
粗粒グライ土壌		〃	98	
関ヶ原町	黒ボク土	多湿黒ボク土壌	04	42
	黄 色 土	黄 色 土 壌	10	27
	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	16
		粗粒灰色低地土壌	〃	121
	グ ラ イ 土	細粒グライ土壌	14	12
		グ ラ イ 土 壌	〃	4
粗粒グライ土壌		〃	55	

市町村名	土 壤 群	土 壤 統 群	土 壤 統 群 番 号	分 布 面 積 (ha)
輪之内町	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	196
		灰色低地土壌	〃	10
	グライ土	細粒グライ土壌	14	964
		粗粒グライ土壌	〃	10
安八町	灰色低地土	細粒灰色低地土壌	13	200
	グライ土	細粒グライ土壌	14	311
		グライ土壌	〃	227

(2) 畑の部

市町村名	土 壌 群	土 壌 統 群	土壌統群番号	分布面積(ha)
大 垣 市	褐色低地土	褐色低地土壌	12	215
羽 島 市	褐色低地土	褐色低地土壌	12	488
		〃 (砂礫質)	〃	84
海 津 町	褐色低地土	褐色低地土壌	12	179
		〃 (砂礫質)	〃	23
平 田 町	褐色低地土	褐色低地土壌	12	100
		〃 (砂礫質)	〃	22
	灰色低地土	灰色低地土壌	13	50
南 濃 町	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壌	01	130
	黒ボク土	厚層黒ボク土壌	03	50
		黒ボク土壌	〃	50
	黄 色 土	黄 色 土 壌	10	100
	褐色低地土	褐色低地土壌	12	60
灰色低地土	灰色低地土壌	13	50	
養 老 町	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壌	01	50
	黄 色 土	黄 色 土 壌	10	60
	褐色低地土	褐色低地土壌	12	64
	灰色低地土	灰色低地土壌	13	170
上石津町	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壌	01	109
	黄 色 土	黄 色 土 壌	10	52
垂 井 町	岩 屑 土	岩 屑 性 土 壌	01	73
	黒ボク土	厚層黒ボク土壌	03	23
		黒ボク土壌	〃	7
	黄 色 土	黄 色 土 壌	10	3
褐色低地土	褐色低地土壌	12	90	
関ヶ原町	黒ボク土	黒ボク土壌	03	68
輪之内町	褐色低地土	褐色低地土壌	12	199
安 八 町	褐色低地土	褐色低地土壌	12	241

Ⅳ 土地利用現況

1 農 地

本図幅の中央を走る養老山地を境にして、農地の利用は著しく異っている。

木曾、長良、揖斐の大河川によって形成された沖積平野は広大な農地としての利用がなされている。この地域は主に水田として利用されており、県下有数の穀倉地帯となっている。ほ場整備事業、かんがい排水事業等の基盤整備事業により、後背湿地に位置するかつての低湿な農地も生産力の高い農地に転換し、大型機械の導入が可能になったこととあいまって、生産性の高い農地となっている。

羽島市、大垣市などでは、都市化が進むにつれて農業形態も都市近郊型へと移行し、花き栽培、果樹類、蔬菜類などの施設栽培が盛んである。

養老山地と鈴鹿山脈に挟まれた丘陵地では、河岸段丘や土地の開折した箇所を利用しての水田耕作がなされている。

丘陵地を利用した農地としては、上石津町の茶、桑の栽培があり、養老山地東面の扇状地では果樹（みかん）の栽培がなされている。

2 林 地

本図幅内の林地は養老山地以西に限られている。

上石津町を中心とする地方では、一般家庭においてガスが使われるようになる昭和30年代までは薪炭材生産が盛んに行われていた。これらの原料として広葉樹は貴重な資源であり、伐採した広葉樹の萌芽（わき芽）を利用して再び広葉樹を育成する林業経営が行われていた。このため、天然林広葉樹の占める割合が高い。

関ヶ原町のうち調査地域である今須地区は「今須林業」として著名である。

ここでは、複層林施業、枝打ち、択伐などの集約的林業経営が行われている。このため地区内の林地は、ほとんどスギの人工林となっている。

養老山地南部では、アカマツ天然林またはアカマツと広葉樹の混交林が多い。

3 市街地、集落等

木曾川、長良川、揖斐川の大河川の合流地に位置する沖積平野では、河川の氾濫がくり返された。このため古くからの集落はわずかな微高地（自然堤防）に発達し、洪水から家屋を守るため人工の堤により集落を囲った。これが「輪中」と呼ばれる水郷地帯独特の集落となった。養老山地以東の平野部にある集落の多くは、この輪中が発達したものである。

河川敷の利用として、安八町ではゴルフ場がある。

養老町には「養老の滝」を中心とした養老公園があるほか上石津町にも大きな公園施設がある。

養老山地南部の南濃町では、建設用資材として土石の採取が盛んに行われている。また鉄道沿線で宅地開発がなされたほか大規模な墓地開発がなされている。

鉄道は比較的良く発達している。東海道新幹線の岐阜羽島駅があり、名古屋鉄道がこれに接続している。また大垣市と三重県桑名市を結ぶ近畿日本鉄道が養老山地東方を南北に貫いている。

道路網の発達も良く、名神高速道路が東西に横断し、大垣市、羽島市にはインターチェンジがある。

南北方向に国道258号、365号が走っているほか平野部では県道、市町道が網状に良く発達している。

木曾川、長良川、揖斐川の大河川を横断する橋梁も整備され、県内域はもとより、県域を越えて愛知県、三重県との交通も盛んである。

(岐阜県企画部土地対策課 服部 富雄)

1986年3月 印刷発行

岐阜県土地分類基本調査

「彦根東部」、「津島」、「桑名」

編集発行 岐阜県企画部土地対策課

〒500 岐阜市藪田1-1
電話 (0582) 72-1111

印刷 日新印刷株式会社
岐阜市蔵前7丁目12番21号